

エッセイ

動詞カルタ・ビンゴで笑顔を増やしたい

細野尚子

キーワード

動詞, カルタ, ビンゴ, 外国につながる子, 国際教室

1. はじめに

「先生、歯が落ちたよ」と言われ、「どこに？」と聞いてしまった。「違うよ、ここだよ」と口の中を見せてくれた。(ああ、歯が抜けたのだ)「よかったね。いつ？」と聞いたら、やっと、通じたと思ったのか、彼は、笑顔になった。「きのう」と答えた。私は、「〇〇が落ちた」と聞いた時、反射的に「どこに落ちたのだろう？」と考えてしまった。無意識に、歯をなくしてしまったのかと早合点していた。

日常会話には問題がないと思われている子であっても、外国につながる子どもにとっては、「通じなかった」「わかってもらえなかった」という経験は、日本語母語話者の子どもに比べて、とても多いだろう。わかってもらえるまで説明しようとする粘り強く、おしゃべりが好きな子を除いて、たいていの子は、話の続きをするのをあきらめてしまう。私も時間の都合や他の子の対応もあって、なかなかずっとは付き合えない。それでも、国際教室では、話しかけてくれた子が、笑顔で終われるように心掛けて接している。それと同時に、「通じなかった」という経験が、負に作用してしまい、間違えることを恐れる子どももいるのではないかと、反省する日々である。

2. 外国につながる子どもたちとの出会い

私は、現在、公立小学校の国際教室で主に教科学習の理解を支援するために、わかりやすい日本語で教科を教えている。今から10年ほど前は、別の小学校で学習面と生活面で遅れがちな子のいる教室に入り、個別の対応が必要な子の支援をしていた。1年生の支援をしていた時に、Aちゃんの担任の先生に声を掛けられた。Aちゃんは、タイから来た子だった。

「Aちゃんのことが、心配です。わからないのが、言葉によるものなのか、本当に理解できないのか、その判断に困っているので、そばでサポートしてほしい」と言われた。そこで、授業中に隣につくことにした。図工の時、これから何を作るのかを身振り手振りで事前に説明すると、楽しそうに作っていたり、算数の文章題をブロックや図を使ったりしてゆっくり説明すると、できることがわかった。しばらくすると、休み時間も友だちといるようになった。Aちゃんとの出会いがあって、私は、外国につながる年少者の日本語教育を専門に学びたいと思い、大学院に入った。大学院入学後、再び、その小学校を訪問すると、Aちゃんは、3年生になっていた。日本語がとても上手になっていたのに、驚いた。タイ語のできる先生からの取り出し授業も受けていた。担任の先生から、「日本語はとても上手になった。手も挙げて発表もしている。運動会では応援団に入った。学校生活は、順調です。でも、文を書

くと、うまく書けない。言いたいことは、あるみたいだけど、書けない」と教えてもらった。取り出し授業の先生には、「音読は、とても上手になったし、わかる言葉も増えた。“ぽっかりと浮かぶ”を説明する時に、母語には“ぽっかりと”にあたる語はない。タイ語にない日本語がたくさんあるので、そこをどうしたらいいか、いつも考えている」とおっしゃっていた。Aちゃんは、宿題や休みの日の過ごし方に不安があるようだった。それぞれの先生方もAちゃんも1年生の時とは違う悩みを持つようになっていた。そこで、お願いをして、修士論文の研究のために3年生から4年生の2年間の作文を調査させてもらった(細野, 2011)。Aちゃんと日本語母語話者の子どもたちとの作文を比較すると、作文の書き方や語彙の使い方に違いをみることができ、外国につながる子が日本語を使って書くことの難しさや日本語母語話者の子どもとの違いに気づかされた2年間であった。

その後、その院生時代のご縁で、ある科研費プロジェクトに参加させてもらった(西川・青木・細野・樋口, 2015; 西川・細野・青木, 2016)。日本語初期指導の段階が終わった外国につながる子どもたちに対する支援を模索していた私にとって、さらに私に多くの気づきと教育実践につなげていく方向性を与えてくれた。

3. 意外と簡単な日本語を知らない、日本生まれ、日本育ちの外国につながる子どもたち

西川氏らとの研究の目的は、「日本で生まれ育ち、日常会話においてはMono⁽¹⁾の子どもと変わらない日本語力を持つJSL⁽²⁾の子どもであっても、Monoの子どもであれば『誰でも知っているような“簡単な語”』を知らないことがあることを明らかに」(西川・青木, 2018, p.38)することである。JSLの子どもの日本語の語彙力は、時間とともに伸びていくことは、明らかだ。しかし、ある時、周囲の教員や支援者は、「あれ? 難しいのかな?」と感じ始める。その時、言葉の難しさは、抽象的な表現や難解な語が原因だと考えられてしまうことが多い。特に小学校高学年になっていると、Monoの子どもたちにも難しさを感じている子はいるのだから、JSLの子どもたちがわからないのは、しょうがないと思われることもある。しかし、実は、流暢な日本語を話す日本生まれ、日本育ちのJSLの子どもたちの中には、「簡単な日本語」にできえつまづいている子どももいることに周囲の教員や支援者が気づいていないことがある。

Monoの子どもにとって「簡単な日本語」とは、私たちの研究においては、就学前に身に付けていると考えられる言葉である。つまり、Monoの子どもが母語習得過程で自然に身に付ける言葉である。そこで、まず、「簡単な日本語」の中で、動詞に着目し、特に和語動詞を選び、調査対象語のリストを作成した。「かける・ひく・さす・おちる・きる」などの多義動詞、母語によって意味範囲に違いがある「きる・ぬぐ・はく・かぶる・とる・はずす」などの着脱動詞、「あく・あける・しめる・しまる・たつ・たてる」などの自他動詞、日本語特有のコロケーションに関わる「ごはんをたく・ボートをこぐ・くつひもをむすぶ・ほどく」などの動詞、Monoの子どもなら誰でも知っているような「日常的で簡単な日本語」の31語の動詞である。それらの動詞にイラストをつけて、70アイテムの調査票を作り、JSLの子どもとMonoの子どもに調査をした。

調査対象者は、小学2年生から中学1年生のJSLの子どもとMonoの子どもである。JSLの子どもについては、「日本で(生まれ)育ち、日常会話においてはMonoの子どもと変わ

らない日本語力を持つ」(西川・青木, 2018, p.56)ということを支援者に評価してもらった163名である。Monoの子どもは、1,333名である。

70 アイテム全てを調査した小学4年生から中学1年生において、JSLの子どもとMonoの子どもの差があるのは、34 アイテムあった(西川・青木, 2018, 表6-2)。

「やっぱりそうなのか」という可視化できた喜びと同時に、現実の厳しさを知った。なぜなら、たった70 アイテムの中で34 アイテムに差が見られるのなら、どれほど多くのまだ見えない、苦手な言葉があるのだろうかと思ったからだ。しかし、この34 アイテムの共通点を分析し、整理することが、教える時の出発点になるのではないかと考えた。分析の中で、様々な興味深い結果が見られた。その一つが、多義動詞の用法に関するものである。多義動詞「ひく」では、中心的な用法である「(そりを) ひく」「(網を) ひく」はJSLの子どもとMonoの子どもの差があり、逆に派生的ではあるが学校場面でよく使用される「(風邪を) ひく」「(ピアノを) ひく」「(5 から 3 を) ひく」「(線を) ひく」「(くじを) ひく」は、正答率も高く、差もほとんどないことがわかった。差が見られたものはJSLの子どもが普段、学校生活の中であまり遭遇しない状況を表す動詞だった。西川・青木(2018, pp.93-34)では、以下のようにまとめている。

「JSLの子どもは“学校場面でよく使用する動詞・用法のアイテム”についてはMonoの子どもと同様よくできるが、家庭場面で主に使用する表現をはじめとする、“学校場面ではあまり使用しない動詞・用法のアイテム”についてはMonoの子どもの間に差があるといえそうである。すなわち、子どもが日本での生活において接する場面と頻度の要因が、JSLの子どもの正答率に大きく影響している可能性が高い。」

また、動詞の産出が苦手な子どもの割合を調べた結果でもJSLの子どもたちの厳しい現実が見られた。低得点層に入った子どもの割合は、Monoの子どもは5 パーセント前後であるのに対して、JSLの子どもは20 パーセント以上おり、年齢を重ねるごとにその割合が多くなるということがわかった。

その後、Monoの子どもたちは、何歳くらいの時にこれらの動詞を使うようになるのかを確認するために、追加調査をした。幼稚園に通う3歳から5歳のMonoの子ども20名ずつに、イラストを見せながら、同じアイテムの動詞を口頭で調査を行った(細野, 2016)。

表1 JSLの子どもとMonoの子どもの差のある34 アイテム

(ハチマキを) しめる	(トランプを) きる	(ボートを) こぐ	(目薬を) さす
(泡を) たてる	(橋を) かける	(旗を) たてる	(日が) さす
(ハンガーに服を) かける	(シートベルトを) しめる	(靴ひもを) ほどく	(ご飯を) たく
(ボタンを) はずす	(木が風で) たおれる	(辞書を) ひく	(泡が) たつ
(そりを) ひく	(水を) きる	(コンセントに) さす	(帽子を) かぶる
(ドアが) しまる	(掃除機を) かける	(スイッチを) きる	(布団を) かける
(靴を) ぬぐ	(串に魚を) さす	(プレゼントを) くれる	(網を) ひく
(ズボン) はく	(ボタンを) かける	(電話を) かける	(花が) さく
(プレゼントを) もらう	(服を) ぬぐ		

JSLの子どもが苦手と思われた着脱動詞の「シャツをきる・ぬぐ、ズボンをはく、靴をはく・ぬぐ」は、幼稚園の子どもは、正確に使い分けをしていることがわかった。衣服の脱ぎ着は幼稚園の子どもたちには日常の一部であり、親や教師からたくさんの声かけを受けていると思われる。場面での経験やインプットの頻度が多いことが、言葉を身に付ける大事な要素になっていることを実感した。

どんな言葉が苦手なのかを調査し、それが可視化できたことは、今も大きな励みになっている。それからは、教える時に「簡単な日本語」と思われている言葉にも配慮し、身に付けることの大切さを意識して、取り組んでいこうと考えるようになった。国際教室で教えている目の前にいる子どもたちに、どうやってインプットを増やしていけばいいのだろうと次の課題が見えてきた。

4. カルタで動詞を教えよう

幼稚園での調査の後、JSLの子どもたちの苦手な言葉のインプットをどうやって増やしていけばいいのだろうと考え始めた。日本語のインプットを増やすためには、視覚的なサポートがあるイラストと動詞だけではなく状況がわかるような文と組み合わせる方が効果的なのではないかと思った。そこで、イラスト付きのプリントを作って、プリント学習を試みた。しかし、何度もやると飽きてしまったり、点数を気にする子が出てきたり、モチベーションが上がらないので、プリント学習ではくり返し取り組むことは難しいと気づいた。楽しく、かつ何度もくり返して取り組めるもので、やがて、知らぬ間に覚えられるようになるには、カルタがいいのではないかと思いついた。それが動詞カルタを作ろうと思うきっかけだった。読み札には、動詞を含む文を書き、取り札には、動詞の最初の一字とイラストや写真を載せた。通常の取り札は、文頭の一字を入れるが、動詞に注目してもらうために、取り札には、動詞の最初の一字を入れた。

授業の終わりや休み時間に数人のグループで楽しく取り組むことができた。カルタを通して、「知らなかった」「こんな風に言うんだ」という声が聞かれた。また、自他動詞に対しても、使い分けの難しさを感じているようで、「ドアが開く・ドアを開ける」「ドアが閉まる・ドアを閉める」などもイラストを通して、違いに気づいていく子どももいた。特に、家庭ではインプットが受けられない動詞に対して、カルタを繰り返し行うことで興味と関心を高められることを知ることができた。



図1：動詞カルタ（左）とカルタに取り組んでいる様子（右）

5. 動詞カルタから動詞ビンゴへ

国際教室で小学2年生の国語の「スイミー」を学習していた時、第一場面で「スイミーは、どんな魚だろう」という質問をした。ある JSL の子が、「スイミーは、泳ぐのが好きだから、元気な子」と答えた。その後も口々に「明るい子」「楽しい子」と意見が出た。他の JSL の子が「自分だけ黒いから、かなしい子」と答えた。その意見に続けて、さらに別の子が「くやしいよ」と続けた。自分とは違う考えを聞いて、様々な観点からスイミーを捉えようとしていた。自分とは違う考えや感想があるから、「なるほど」と思ったり、「そうかな」と考え直したりできる。自分と違う考えや意見を聞くことができることは、とても大事なことだ。こういう場面があることで、さまざまな語彙が身に付くと感じる。そして、自分との違いを受け入れ、友だちの存在のよさに気づいていく。

その一方で、カルタなどのゲームをするときは、争いが起こることがある。どの子どもも同じように勝ちたいと思うからだ。そこには、日本語力も来日年数も関係がない。ある時、動詞のカルタをしていたら、誘っても、「見てる」と言っ、入らない JSL の子がいた。理由を尋ねると、取った枚数を数えて、勝ち負けを競うのが「いやだ」と言う。子どもの世界では、ゲームは楽しいけれど、いつも同じ子が勝ったり、なかなか勝てなかったりという結果に直面し、悲しい気持ちになることもある。だから、グループ作りにも配慮しながら、行うこともある。その後、来日間もない JSL の子どもにも、楽しんで参加してもらうには、どうしたらいいのだろうと考えるようになった。休み時間の様子を観察するうちに、日本語力の低い子は、カルタよりすごろくやビンゴの方が好きだということに気づいた。それは、すごろくやビンゴのようなゲームは、偶然性があり、逆転が起こるから、勝つチャンスがどの子にもあるからだ。来日間もない JSL の子どもも大きな笑い声をあげている。子どものためには、参加するからには、誰もが平等に勝つチャンスがあるゲームを用意することも大切なことではないかと思った。

そこで、着脱動詞や多義動詞やコロケーションに関わる動詞のビンゴを作ってみた。みんなやってみると、もうビンゴになっているのに、「最後までやりたい」と言う。驚いたことに、日本語初期指導の JSL の子どもが「“かける” がいっぱいある」「ここに“きる”，ここにも“きる”。“きる” がいっぱい。知らなかった」と気づくようになった。来日間もない JSL の子どもにも笑顔が見られた。インプットの方法を変えるだけで、楽しむ気持ちや言葉に対する発見が増え、さらに、「自分も参加できる」という満足感も味わえるのかも思われないと思った。



図2：動詞ビンゴに取り組んでいる様子




 あける	 きる	 かぶる	 ひく	 かける
 ひく	 たく	 きる	 ぬぐ	 ひく
 こわれる	 かける	 はく	 さく	 はく
 ひく	 しめる	 ぬぐ	 かける	 しまる
 かける	 きる	 たおれる	 ひく	 あく

図3：動詞ビンゴのシートの例

6. 動詞は、どうやって教える？

動詞は、教えるのも理解するのも、双方ともに本当に難しい。「これです」と見せることができる名詞と違って、ジェスチャーでも見せることができない動詞がたくさんある。だからこそ、経験や体験、コミュニケーションが大切だ。JSLの子どもが「目をしめる」と言うのを聞いて、「目をとじる」ということを言いたいのだなと思った時、「日本語では、何と言うか」という結びつけを誰かがしなければ、言葉をふやすのは難しいと考える毎日だ。私の勤務している小学校は、中国につながる子が多く、次にフィリピン、タイとなっている。「先生、中国語、話せる？」と聞かれる。「話せないの。だから、日本語で話して」と答える。どうしても言いたいことがあると同じ母語の子同士で話し、日本語で通訳してくれる。それでも私がわからないとジェスチャーを使い始める。周りの子がどんどん集まってきて、何が言いたいのか、何を言おうとしているのかをどうにかして伝えようとしてくれる。やさしくて、おもいやりのある子ばかりである。しかし、ジェスチャーだけで伝えるには、限界がある。

小学4年生の国語の単元「大きな力を出す」「動いて、考えて、また、動く」では、たくさんの動詞が出てくる。子どもたちが、本文に出てくる「ひざを高く引き上げる」「地面を強くふむ」動作をジェスチャーで伝えようとしてくれる。しかし、どうしても動作化が難しい時、例えば、「あしを後ろにけるのではなく、体の下にしぜんに下ろしていく感じで走る」という文を理解する時は、動画をみんなで視聴した。「呼ぶ」という言葉を説明する時に、それをジェスチャーで表現するのも、難しかった。ジェスチャーでやっても

不思議そうな顔をしているので、ことば絵辞典を使った。ことば絵辞典には、「おーい」と吹き出しのついた子どもの絵があった。「呼ぶ」という言葉は、「言う」とも「話す」とも「叫ぶ」とも違うということを、絵によってつかめたようだ。日本語を共通語にして、一つの話につながった時、大きな笑顔がどの子にも見られる。教える工夫は、まだまだ、たくさんあると感じている。

7. 動詞と場面・頻度について

動詞は、グラデーションのように類語があり、境界線がはっきりとしていない。国語辞典や類語辞典を使っても、子どもの言いたい言葉を一緒に探せない場合もある。

西川・青木（2018, p.152）では、JSLの子どもが苦手とする語について、次のように述べている。「JSLの子どもが苦手とする語には、場面と頻度や母語の影響が関係するということである。場面と頻度が関係するというのは、つまり、家庭では母語を用い、学校では日本語を用いて生活しているJSLの子どもにとって、家庭場面で主に用いられる語や表現については、日本語でのインプット・アウトプットの機会（頻度）が少ないため、苦手であるということになる。」

上述の「呼ぶ」という動詞にしても、「ねえねえ、おかあさーん、おかあさーん」と子どもが言った時、母親が「そんなに何度も呼ばなくても、聞こえているわよ」という会話が家庭では、何度も何度もあるだろう。また、「アイロンをかける」「掃除機をかける」のカルタの取り札のイラストを見て、「これ、なんていうの?」「見たことはあるけど」と名詞もわからないJSLの子どもたちもいる。家庭で使うものの多くの名詞は、家庭での言語でインプットされていて、日本語のインプットは少ない上に、親に教えてもらうことができないこともある。

また、青木（2016, pp.109-110）においても、多義動詞は「特定の名詞との組み合わせった特定の意味・用法が、学年・学校種の各レベルに渡って（長期にわたって）[中略]頻出している場合は、Monoと変わらない高い正答率を示すものの、名詞の種類や分類される動詞の意味項目が特定の範囲を超えて広がり・深まりを見せ始めると、Monoと大きく差を開けられてしまっている。」とある。つまり、このことから言えることは、日本語初期指導のころから意識して様々な方法で言葉をインプットして、蓄積を続けることがいかに重要なことか、ということだ。国際教室では、家庭という場面での少ない経験を補うためにも絵本の読み聞かせを大切にしている。その時、ゆっくりと絵と字を見せながら読む。そうすると、口を一緒に動かしている子どもたちが見られる。小鳥が、親鳥の鳴き声をまねしているかのようである。読み終わったあと、「好きなところは、どこ?」と聞くようにしている。なぜなら、新しく知った言葉や今までに蓄積した言葉をアウトプットすることも同時にとても重要であるからだ。言葉のやりとりの頻度が多ければ、多いほど、言葉は磨かれるだろう。学校や社会の中でのコミュニケーションを通して言葉の発見や蓄積を行い、将来は、自分一人でも、本、辞典、動画、インターネットなどで言葉の発見や蓄積を続けていき、適切な言葉を知り、選び、使う力を持った人になってほしいと願っている。

8. 母語について

JSLの子どもが転入してくると、同じ国の子どもが、母語で話しかけてあげたり、遊びに誘ったりする場面を多く見る。日本の学校の生活について親切に教えてくれる子が実に多く、転入してきた子もうれしそうである。国際教室の担当者としては、国際教室の先輩として活躍する姿を心強く感じ、温かい気持ちになる。

日本語の言葉や表現は、母語に置き換えることができない場合がある。少しずつ文が書けるようになると、「ごはんをやく」「ラーメンをすう」と日本語としては正しくないが、どうにかして母語を日本語に置き換えて、伝えようとする。その意志と知恵に驚かされる。そして、正しい日本語を知ると、うれしそうな笑顔を見せてくれる。

母語の力は、同じ年齢であっても、母国での学習経験や来日後の環境などによって、一人ひとり違う。授業で感想を書いたり、自分の意見を書いたりする時、本人の希望を聞いて、母語で書いてもらって、あとから母語支援の先生に日本語訳をお願いすることもある。しかし、「母語でも、なんていうかわからない」という言葉を聞くことがある。3年生の国語の物語文「モチモチの木」を学習していた時、豆太という主人公の名前を「どうして、豆がつくのか」とか「モチモチの木って、何？」という言葉による疑問も「じさま」「せっちん」という古い日本語が含まれている文にも、四苦八苦しているようだった。そこで、物語の内容を理解する助けになるように母語で書かれた本を借りてきた。「モチモチの木の中国語で書いてある本を借りてきたよ」と声をかけた。「わー、読みたい」「見せて、見せて」という反応がくるのかと期待していたが、「へー」「ふーん」と言われた時、心底驚いた。そこで、小学校の入学からいるJSLの子どもに「喜んでもらえると思ったのに」と伝えた。そうしたら、「先生、私、ここに（この小学校に）1年生の時からいるんだよ。中国語を読めるはずないでしょ」と言われた。いつも、転入生の子に中国語でやさしくサポートしてくれる彼女を私は全然、理解していないことに気づいた瞬間だった。上手に中国語を話しているからといって、年齢相当の母語の力をもっているとは、限らないということを教えられた。もっと簡単な中国語で書かれた絵本を見せた時も「だから、読めないんだってば」と怒らせてしまった。私の思い込みで謝ることがたくさんある。彼女は、私が授業の始めに読む日本語の絵本をいつも真剣に聞いていた。知らなかった日本語を知ると、いつもうれしそうな笑顔を見せてくれている。

個人面談で、「うちの子は、日本で生まれて、日本の保育園も行ったんですよ。なのに、なぜ、あの子は日本語ができない」と肩を落とす父親がいた。そういう時、「あきらめないでください。毎日、いろいろな言葉を覚えています。日本語は学校に任せてください。家庭では母語も使ってください。いろいろな言葉を教えてください」と伝える。母語と日本語と両方の言葉を身に付けることは、とても大変なことであるので親子共に励まし続けたい。

9. 学ぶ楽しさと苦しさ

国際教室では、多くの経験を持つことも大切な学習として取り組んでいる。日本の行事や文化を経験することは、日本を知る上で大切なことである。6月から7月は、七夕の行事を体験した。短冊にお願いを書いたり、浴衣を着て写真を撮ったり、とても楽しそうだった。短冊には、「～ができるようになりますように」「～になれるように」という文に

自分の思いをのせた。「泳げるようになりますように」「フィリピンに帰れますように」「日本語がわかるようになりますように」「大人になったら、カッコいい車にのれますように」とさまざまだった。友だちの短冊を見て、「なれるといいね」「がんばってね」という交流もまた、すてきである。夏休み前には、担任の先生や日本語や母語の先生に向けて、暑中見舞いを書いた。「生活科のときに、助けてくれてありがとうございます」「テストの時に、漢字に日本語をつけてくれて、ありがとうございます」と感謝の気持ちを表すことができた。うれしかったのか、とても誇らしげにしていた。そして、返事が戻ってくることも期待して、わくわくしているようだった。生活の中で日本語を使うことを経験し、その楽しさに触れることができた。

しかし、その一方、苦しいことも多い。国際教室の中でも、JSLの子ども同士で「変な日本語」「そんな日本語ないよ」ときつい言葉で言い合うこともある。大人は、一人ひとりの来日年数、家庭環境、学習状況などを知っているが、子ども同士に遠慮や容赦はない。読み間違えや発音の違いを笑われることもある。国際教室で、面と向かって言われたり、笑われたりするのにも悔しい思いがあると思うが、クラスで間違えた時、周りのMonoの子どもたちに「あれ？」という顔で見られた時、もっと苦しいのではないかと思う。

「間違えてもいいんだ」という言葉が、学校の中のどこにでも通用すると思う。だから、国際教室の中では、何度もくり返し、しつこいくらいに「間違えていいんだよ」と言っている。「間違えてもいいから、言ってみよう」から「たくさん、間違えて」まで、いろんなバリエーションで「間違えること」を奨励している。

10. 楽しく学んでほしい

雨の日の休み時間、国際教室は、にぎやかだ。一人でゆっくり本を読んだり、友だちとカルタで遊んだり、ビンゴをしたり、おしゃべりをしたりするために来る。いろんな学年の子とやるカルタは、楽しそうである。カルタは、上述の研究のあと作った動詞のカルタの他に、市販の反対ことばのカルタ、ことわざカルタなどいろいろなカルタがある。一方で、雨が降っていないなくても、毎日のように顔を出す子がいる。「今日、授業ある？」「〇〇先生（母語を話せる先生）、来てる？」という質問や「今日、給食に来てくれる？」というリクエストをする。「〇〇先生、来てるよ」「給食、一緒に食べよう」と返すと笑顔になる。友だちが少ないことやクラスの中での居場所がないなど孤独な状況がある。だからこそ、国際教室での仕事は、学習だけでなく、子どもたちの孤独を受け止めること、支えていくこと、励ましていくことも大きな役割である。

本稿で紹介したカルタやビンゴは、言葉を学ぶ道具（ツール）であるが、仲間を増やし、コミュニケーションをし、笑顔を作ることもできるということを子どもたちから教えてもらっている。これからも、「簡単な日本語」と思われている言葉にも気を配り、支援していきたいと思う。少人数で学ぶよさは、発表する頻度も多く、言葉をインプットしている瞬間、アウトプットをしようとしている瞬間を見られることも挙げられる。一人ひとりが大切な存在で、家族がいて、つながる国がある。日本語力も好きなことも苦手なことも違う。しかし、どの子もいろんな人とつながり、将来の夢を語り、自分らしく、幸せな人生を歩んでほしい。日本語を学ぶ子どもたちの成長する姿を見せてもらえることの幸せをいつも感じながら、子どもたちから多くのことを学んでいる。

【注】

- (1) モノリンガル (Monolingual) の略。
- (2) 日本語が第二言語であることを示す Japanese as a Second Language の略。

【引用文献】

- (1) 青木由香 (2016) 「学校教科書による「ひく」の使われ方」『日本語を母語としない子どもの語彙とコロケーションの知識に関する研究』2011～2015年度科学研究費補助金(基盤研究C) 成果報告書(代表: 西川朋美, 課題番号: 23520619), 97-112.
- (2) 西川朋美・青木由香 (2018) 『日本で生まれ育つ外国人の子どもの日本語力の盲点』ひつじ書房
- (3) 西川朋美・青木由香・細野尚子・樋口万喜子 (2015) 「日本生まれ・育ちの JSL の子どもの日本語力ー和語動詞の産出におけるモノリンガルとの差異ー」『日本語教育』160号, 64-78.
- (4) 西川朋美・細野尚子・青木由香 (2016) 「日本生まれ・育ちの JSL の子どもの和語動詞の産出ー横断調査から示唆される語彙力の『伸び』ー」『日本語教育』163号, 1-16.
- (5) 細野尚子 (2011) 「タイ人児童の来日 3, 4 年目の学習作文の特徴: 在籍クラスの日本人児童との比較」『横浜国大言語研究』29号, 96-77.
- (6) 細野尚子 (2016) 「幼稚園児の和語動詞の産出: -3 歳児, 4 歳児, 5 歳児の対面式調査よりー」『日本語を母語としない子どもの語彙とコロケーションの知識に関する研究』2011～2015年度科学研究費補助金(基盤研究C) 成果報告書(代表: 西川朋美, 課題番号: 23520619), 79-93.

(横浜市立本町小学校 わいわい(国際)教室)